

---

# 真・恋姫無双 俺の外伝

ぐぎゆる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫無双 俺の外伝

### 【Nコード】

N4109R

### 【作者名】

ぐぎゅる

### 【あらすじ】

ごくごく普通のモンハン好きの高校生、武内友和が少女を助けて死んでしまう。意識の中で神様に恋姫無双の世界に転生させられ放り出されるは何もない荒野・・・果たして少年は生き延びられるのか・・・!?

作者は素人なので駄文でしたらすみません

## 〜プロローグ〜（前書き）

注意：基本オリジナルですが武器はモンハン3rdに出てくる武器を使います。これが気に食わないかたは閲覧を極力お控えください。ここはこつしたほうが・・・とかの感想もお待ちしています。一言の評価（面白くない。最高！・・・など）はできるだけお控えください。どこが良かった・悪かったを言ってください。

## プロローグ

「いつてきまーす」

雨が降りしきる中、俺は傘を差し学校に向かう

明日はダチとモンハン3rdで遊ぶ予定。今日が終われば明日は楽しい狩りの日だ

「明日が楽しみだぜ・・・この日のために鍛え上げたこの武器と防具！」

雨が本降りになっていく間にも明日のことを考えていた

そして、なんとなく道路を見ると・・・小さな女の子が水溜りで遊んでいる

3

「あつぶねーなー・・・親は居んのか？」

「おーっす！カズ」

カズというのは友和ともかずのカズで・・・悪友の白石がつけたあだ名俺はその白石に手をふって挨拶する

「おっす、白石」

「なに見てんだ？」

「いやさ・・・道路で遊んでるお子様が居てよ」

「ははーん？惚れちまったと？」

「なんでだよ！」

思わず頭をひっぱたく

クラスでは名物にもなっている俺達のやり取り

「いってーな・・・って、おい・・・あの車なんかおかしくねーか？」

指を差す白石の先を見ればふらふらと車が蛇行運転している

「居眠り運転かぁ？・・・おーい嬢ちゃん！あぶねーぞー」

しかし女の子は気付かずに水遊びをしている

「おいおい・・・やべーんじゃねーのか？・・・お、おい！カズ！」

俺は・・・飛び出していた

一目散に走りこの距離なら・・・だが車が急にスピードを上げた原因はわからないがここで足を止めてはいけない！

俺はスライディングし女の子を脚で押し出す・・・女の子をつまく押し出せた！よし！あとはこのまま・・・

『ガキッ！』

「えっ・・・はあっ!？」

俺は驚愕した。ズボンの後ろポケットに付いているボタンがマンホールの小さな穴に引っかかった

「くそ・・・っ・・・取れないっ!!」

俺は引きちぎろうとするも切れない・・・ヤバイヤバイヤバイ!!!

「カズーーーーー!!!」

俺は白石の声に反応し……

『ドガツ……ガシャーン!!!!』

逃げることも叶わず……撥ねられた

「ぐ……あ……う」

声を出すのも億劫なほどの痛み……見える景色がモザイク調に見える……

「……い……しっ……ろか……!」

白石……は……わり……明日……行け……そうに……  
……ない

ここで俺の意識は途絶えた

## 第一話　く転生、そして・・・く

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・ここ・・・・は・・・・」

「目覚めましたか、ここは天界です。あなたの肉体はないので心に語りかけています」

てん・・・・・・・・かい・・・

「あ、あんたは？」

「この主・・・・・・・・神です」

「・・・・・・・・か・・・・・・・・み・・・・・・・・神!？」

「はい・・・・・・・・状況説明に入ってもよろしいですか？」

「え・・・・・・・・あ・・・・・・・・はい」

「あなたは少女を助けるために死にました・・・・・・・・」

・・・・・・・・死んだのか・・・・・・・・俺

「ですが・・・・・・・・この死は決められた死です」

「・・・・・・・・えつと・・・・・・・・どういうことですか？」

「・・・・・・・・あなたはこれから1800年前の三国が争う時代に行かなければなりません」

え!?!?1800年前!?!?三国!?!?

「時間がありません・・・・・・・・必要なものは送ります。肉体のリミットも解除しておきます、今は凡夫でも鍛えれば呂布に負けるとも劣らないでしょう」

「ま・・・・・・・・待ってくれ・・・・・・・・おい!?!」

「……………では……………ご武運を祈ります」

俺は体に重力を感じ……………すでに体が復活しているのを見ながら落ちていくのを感じる

「うわああああ！！！！！」

とたんに霧のような湿気た感じの空気に変わる……………それを突き抜ければ……………

「そ……………空を飛んで……………」

とたんに異常な事態に気付く

「お……………俺……………このままじゃ落ちる！！！！！」

冗談じゃない！！！！

とはいえこの状態では何も出来ない。もちろん何も持っていない

「ヤバイヤバイヤバイっておい！！！！！」

地面が近づく……………激突する！

俺は目を閉じた。……………が激突せず宙に浮いていた

「はっ……………はっ……………はっ……………」

脂汗を掻きながら、ゆっくりとその場に着地する

「く……………死ぬかとおもった……………」

よくよく考えたら神がそういうことをす訳がないんだが・・・  
俺はテンパっていたので気付くはずもなく

「・・・なにもねー・・・」

神だかなんだか知らないが勝手にこんなとこに放り出しやがって・・・  
ん・・・？なんか鞆がある・・・って俺の鞆じゃねーか！！  
中には・・・最新型の太陽電池の携帯に・・・着替え（黒のYシャツに下着と黒のスラックス）に・・・果物の缶詰色々×20に・・・  
成人コミック（いわゆる艶本・・・って何で入ってたんだ！？）に・・・  
弓・・・

「弓!？」

出してからわかったことだが・・・どうやら何らかの力で小さくな  
ってており・・・出してから元の大きさになったみたいだ

「・・・これ・・・月穿ちセレーネじゃねーか」

俺が遊んでいたモンハン3rdの武器だ・・・何でだ？

「こつちでさあ」

声がする！近くの森に駆け込んで様子を見る

「いねーじゃねーか！」

「つかしいですね・・・確かに何か落ちたと思ったんですがねえ」

「見間違えたんじゃないのかあ？」

「るっせえ！デブは黙ってる！」

どうやら俺のことだろうな・・・にしても・・・ほんとに三国の時  
代に来たんだなあ

あいつらの服・・・黄巾党の服じゃん

ん・・・？あれは・・・流星？にしては軌跡が消えない・・・

『ドゴオオン！！』

っ・・・衝撃がすげえ・・・あいつらは・・・落ちた場所に行っ  
たのか・・・

「・・・よし・・・行ってみるか」

俺は黄巾党のやつらの後をばれないように付いて行く

そこには・・・俺は後の天の御使いとなる北郷一刀いた

## 第二話 殺す覚悟

「……あいつ……まさか俺と同じ……!?!」

呟きながら黄巾党に絡まれる男を見ながらどうするかを考える

「……助けた……ほうが……いいのか?」

折りたたまれている弓を広げる……ばれない様物陰に隠れながら  
弓を構える……とその時

「そのものども待たれい!!!」

俺を含めた全員が落ちてきたの後ろを見る

白い服に身をつつんだ青い髪の女性が立っていた

「一人相手に3人でかかるとは……言語道断!! 貴様ら……覚  
悟しろ!」

俺はその場の状況に混乱し慌てて逃げ出した

「- / ?????」

「はっ……なんだかしらねえが……てめえら! やっちまえ!!」

「あいよっ」

「わ、わかつたんだな」

小さいのが私に跳びかかる

私は槍で小さいのを弾き飛ばす



「てて・・・なんなんだ！？あの女」

「うう・・・痛い」

「情けねーなてめーら」

あの女に負けたんだな・・・

ざまあないな・・・思っているとあの3人が女性に絡んでいた

「へへ・・・お前いい女だな」

「や・・・やめてください」

「いいじゃねーかよ！ちよっと遊ぶだけだぜえ」

あいつら・・・懲りないな・・・

どうするか・・・考えていたが・・・緒戦は他人・・・助けなくともいいとも思ってしまう

「くっ・・・」

弓を構える・・・だが・・・迷う

ここで助けるべきなのだろう・・・だが・・・弓を放せは人殺し

「いやっ・・・やめてください！！！！」

「うるせえ！！！！」

リーダーが女性の頬を叩く

『やめて！！！！』

『うるさい！！！！』

昔の記憶が蘇る・・・

それは家に強盗が押し入ったときの記憶。決していい記憶ではない

「く・・・くそおお！！！！」

ビシュツ

俺は・・・矢を放った

「ごはっ！！」

「アニキ！！」

リーダーに駆け寄るチビとデブ

俺は矢継ぎ早に二発、矢を撃った

「げっ！！」

「ぶっ！！」

その場に2人が倒れる。女性は服を直して逃げるように立ち去る

「はぁ・・・はぁ・・・お・・・おれは・・・」

俺は初めて

人を殺した



「そうと決まれば早く行くか・・・」

待ちの入り口に近づいたころ・・・襲われている女性見つけた・・・  
つてさつき襲われてた人じゃないか  
・・・まったく・・・何でこうなるかな

「やめてください!!」

「いいじゃねえかよ・・・其れとも盗賊団の頭の言うことが聞けねえつてのか？ああん？」

たちの悪い酔っ払いだな・・・

俺は・・・弓を構え・・・矢を放つ

矢は吸い込まれるように男の肩に突き刺さる

「ぎゃっ!!なんだ!？」

「やめるよ、みつともない・・・せつかくの顔が台無しだぜ？」

「てめえ・・・いい度胸してんじゃ・・・『まったくだ。華琳様の治める町でこのようなことをするとは・・・』だ、誰だ!？」

街の方からやって来たその女性は男に囁きかける・・・すると男は青くなりながら一目散に逃げていった・・・何を言われたのだろうか  
女性は襲われていた女性にお礼を告げられるとこちらに来た

「すまないな。旅のものにこのようなことをさせて」

「いえ・・・大事がなければよかったです・・・では」

「待て・・・よかつたら城に招待しよう」

「ちよっ・・・別にいいし・・・そういうのは城の主が決めるんだ  
る?」

「大丈夫だ・・・さあ、いこう」

「お、おい・・・」

俺は名も知らぬ女性に強制的に城に招かれた

〔陳留の城・玉座の間〕

「すげーな・・・」

俺は初めて見る城をまじまじと観察していた  
さつき・・・助けてくれた女性が主らしき少女と話してたけど・・・  
何だったんだろうか・・・

「よく来たわね・・・秋蘭から顛末は聞いたわ・・・礼を言わせて  
もらうわね」

「いえ・・・たいしたことはありませんから」

「改めて自己紹介するわね・・・私は曹操・・・曹孟徳、よろしく」

・・・え？曹・・・孟徳・・・？

確か・・・霸王と呼ばれた魏の君主・・・確か男だったはず・・・

「は・・・はい・・・よろしくです」

「で・・・あなたの名は？」

・・・名・・・か・・・適当に言っとくか

「紅武・・・紅竜進といえます」

「え・・・？」

曹操が驚きの表情を見せた。後ろの秋蘭とか言うのとはなしている。

「そう・・・紅武ね・・・今日は城で泊まっていきなさい」

「は・・・しかし・・・」

「少しばかりの礼と申ってくればいいわ・・・」

「は・・・はあ・・・わかりました」

「秋蘭・・・案内してあげて」

「はつ。さ・・・紅武殿こちらに」

俺はとりあえず曹操の行為を受けることにした

お金は少しでも節約してかないと・・・もたないからな

「こついうところは初めてか？」

「え、ええ・・・そうなんすよ」

「そうか・・・自分の家と思って過ごしてくれ」

案内された部屋に荷物を置き・・・布団に横になる

俺は横になってすぐに眠りについた

次の日

俺を待っていたのは・・・玉座での尋問だった・・・

## 第四話 く霸王の力く(前書き)

PVが2000近くに・・・

みなさま駄文にお付き合いありがとうございます

## 第四話 玉座の間

「いつてーな！離せよ！」

「大人しくしろ・・・取って食いはせん」

俺は昨日の青い髪の女の人に後ろ手に拘束され連行されていた朝、起きて着替えを済ませてすぐに兵が押しかけて来た。抵抗も虚しく拘束され今に至る訳だ

玉座の間

「あら・・・遅いお目覚めね」

「くっ・・・おい！なんだよこれは！」

俺は受けるはずのない仕打ちに声を荒げた

「貴様！！口を慎め！」

「春蘭・・・大丈夫よ・・・で・・・なぜ呼ばれたか・・・わかってないようね」

「当たり前だ！」

「ならば・・・思い出させてあげるわ・・・あなたはの名前は？そして・・・どこから来たの？」

俺は漸く呼ばれた理由を理解した・・・俺がどこから来たのか・・・俺の名前が偽名とわかったからだ

「あなたがどこから来たのかは……この際いいわ……こちらも聞かなかったことだから。ただ……この曹孟徳を謀ろうというのなら……」

俺は……恐怖した。このプレッシャー……殺気だ。昨日の黄巾兵とは比にならない……！！  
体を震わせ歯が震えてカチカチとなる……怖い！こんな年端もない少女の殺気が！

「……言葉は必要なさそうね……秋蘭」

無言で指示すれば兵が拘束を解く。俺はその場に崩れ落ち肩で息をする

「もう一度聞いわ……あなたの名前は？」

「……武内……友和」

「ん……では友和……貴方はどこから来たのかしら？」

「日本……ここからずっと東にある島国だ」

「聞かない名ね……」

俺は体裁を繕うように立ち上がり……俺の状況を話し始めた

「日本と名はこの時代には無い」

「……この時代……？」

「俺は……約1800年前の人間だ」

辺りからざわめきがたつ。それもそうだ……俺が未来から来たというのだから

「静まりなさい！」

鶴の一声で静まり返る城内

「なるほど・・・未来というからには・・・私達のこと未来には残っているのかしら？」

「ああ・・・」

「聞かせてもらえるかしら？」

「・・・そこまで詳しくは無いが・・・この後魏呉蜀に分かれる・・・魏は曹操、呉は孫策、蜀は劉備が上に立って争い・・・その結果・・・蜀が三国を統一。曹操は・・・討たれた筈だ」

辺りがまたざわつき・・・

「貴様ああ！！！！」

「うぐっ！！！！」

黒い髪の長髪の女の人が俺にのしかかり、大剣を振りかざす

「言うに事を欠いて・・・華琳様が討たれるだど！？出鱈目もはなはだしい！！！！」

「春蘭！」

「し・・・しかし華琳様！！！！」

「下がちなさい。春蘭」

恨めしそうに俺を見ながらおそおそと引き下がっていく

「部下が失礼したわね」

「いや・・・大丈夫だから・・・」

そつだ。部下からしたら主が死ぬと言われて黙っていられるわけが無い……心酔しているならなおさらだ

「私の霸道はその程度では揺るぎはしないわ」

……さすが曹操……自信家だな

「ん……そうね……あなたには私の霸道の手伝いでもしてもらおうかしら」

「な……!？」

「あら……私を騙したのだから当然じゃなくて?」

ぐ……それを言われると何も言い返せない

「……何をすればいいんだ?」

「わかってもらえて何より……貴方には天の御使いをやってもらわうわ」

「……天の御使い……?」

「ええ……管輅の残した予言にあるの……黒天を切り裂く流星、天の御使いを乗せ、天より飛来せり。その者、白く輝く衣を纏い、その智と輝きをもって乱世を鎮めんとす……ってね」

ふーん……ってちよつと待て

「俺の服……黒いんだけど」

「……そうなのよね……」

「そついえば……俺と同じように飛ばされていた奴がいたな……服も白かったし」

「そつ……御遣いが2人……吉兆か凶兆か……」

・・・考え込む曹操・・・追い出されたらどうしようか・・・

「・・・とりあえず・・・俺を将として取り立ててくれないか？見習いでもいい」

「・・・どういふことかしら？」

「ここにいるからには・・・やらなきゃいけないことがあるはずなんだ・・・それがわかるだけでもいい・・・頼む」

俺は頭を下げた

「馬鹿な！それこそありえない！」

「そうね・・・馬鹿と意見が同じなのは癪だけど・・・同意見ね」

・・・やはり無理か

「・・・得物は何かしら」

「・・・は？・・・あ・・・弓だけど」

「華琳様！？」

「秋蘭・・・使えそうかしら？」

「かなり荒削りですが・・・磨けば光るか？」

「鍛えてあげなさい・・・貴方もそれでいいわね？」

「あ・・・ああ、わかった」

言われるままに頷き・・・ぽかんとして

「では・・・今日のところは解散するわ」

.....

とりあえず、殺されること無くその場から立ち去る……  
もまだ部屋の場所を覚えておらず困っていると青い髪の女性……  
秋蘭という人が話しかけてきた

「どうした？武内」

「いや……迷ってしまったて」

「クス……こっちだ」

俺は案内の途中……気になったことを聞いてみた

「……あんた……名前はなんていうんだ？」

「私は夏候淵。字は妙才だ」

「夏候淵……夏候惇のおと……妹か」

「ああ……因みに姉者はお前に襲い掛かった者だ」

「ああ……あの人か」

先ほどの黒い髪の女性を思い出す

「あの人か夏候惇……凄かったな」

「先ほどは姉者が済まなかったな」

「いや……あんなこと言われたら普通は本人が怒るのに、部下が怒るのは慕われてる証拠だよ」

「そういつてもらえると助かる」

「……こうしてみると美人だよな」

「そうそう……名前を呼ぶときは真名を呼ばないようにな。殺されるぞ」

「……えつと……」

「私なら秋蘭、曹操様なら華琳様というようにな」

「なるほど・・・それは本人から許されたら・・・言っていないだよな？」

「物分りが早くて助かる」

そんなこんなで部屋に着いた

「訓練は明日からだ・・・迎えに兵を寄越す。それまでに起きろよ？」

「了解したよ」

その日はそれ以降何もすることはなく・・・眠りに付いた

## 第五話 訓練

朝・・・俺は着替えていると・・・

「武内殿、迎えにありがとうございました」

「すみません・・・すぐに行きます」

俺は着替えを済ませれば兵に付いていき訓練場に向かう

「おはよう、武内・・・眠れたか？」

「はい、おかげさまで」

「では・・・早速始めようか」

「はい！」

こうして訓練が始まった

「まずは・・・どの程度弓が扱えるか確かめようか」

俺は言われるままに指定された場所に立ち・・・弓を構える

「あの丸で囲んだ×印を狙ってみろ」

「はい！」

俺は弦を引き絞り、狙いを定め・・・

ビシュッ

ガッッ！



苟？か・・・ん？

「おい・・・駄目男ってなんだよ」

「見たまんまよ。あれだけしか撃ってないのにへたれるなんて・・・  
駄目男じゃない」

ぐっ・・・事実だから言い返せないな・・・

「桂花・・・あんまりいじめちゃ可哀想よ」

「・・・わかりました・・・」

不満タラタラの顔で俺をひと睨みして曹操の後ろに下がった

「どう？調子は」

「技術は抜きん出てるが・・・体力不足だと・・・走りこみ確定だ  
な」

「体力があれば役に立つってことね。これで技術もなかったら放り  
出しているとこだわ」

・・・曹操もボランティアではないからな・・・その可能性もあつ  
たわけだな

「それにしても・・・貴方の世界はどういう世界だったの？」

「・・・そうだな・・・争いのない世界だな・・・あってもそ  
れは俺と関係ないところで起こっていたから・・・」

「平和そうね」

「ああ・・・大人になるまで学校行って・・・親に食わせてもらっ  
てたからな」

思い出せばホームシックに駆られる・・・やめよう

「働かないの？」

「・・・大人になるまでは親に食わせてもらって・・・大人になって働いて親を返していくんだよ」

「なるほど・・・で、学校って言うのはなんなの？」

「そうだな・・・文字の読み書きや計算、歴史なんかを学ぶところさ」

「私塾みたいなものね」

「ああ・・・6歳になったら学校に入って・・・9年義務教育・・・つまり学校に行く義務ってのがあってそれから15歳までは学校に行かないきゃならないんだよ」

俺の説明に興味深そうに聞き入る曹操・・・苟？も聞き入っている

「なるほど・・・義務教育か・・・でもそうすると知恵をつけて国を治めている者に反発するものが現れなくて？」

「そこは法律ってものがあってそれに触れたら罰せられるんだよ」

「へえ・・・私たちには思いつかないわね」

暫く曹操と話した後俺は城の周りを日が暮れるまで走りこんだ

「お疲れさま」

「はあっ・・・はあっ・・・お疲れ・・・さます」

おれはそのまま大の字になって仰向けになった

「続きそうか？」

「はあっ・・・ああ・・・続きそうだ」

「それは重畳・・・ではまた明日な」

俺は暫くして部屋に戻り着替え今日はそのまま死んだように眠った

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4109r/>

---

真・恋姫無双 俺の外伝

2011年10月8日20時28分発行